「あなたの中に！！」

～あなたの胸に手を～

ヨハネ１：１～１２

ヨハネ１：１～

「この方はもとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」(ヨハ１：10、11)
今回はマリアの視点からクリスマスを見ていこうと思います。マリアは結婚前、厳しいユダヤの法律の中でイエス・キリストを身ごもりました。これは彼女にとって「命の危険」です。そんな危機的な状況の中で天使は彼女に「恐れるな」と言います。このことを信じたいと思いました。でも心の中では葛藤です。「本当なのだろうか」・・だからこのクリスマスの始まりは「絶望と葛藤と疑い」なのです。マリアがどんな気持ちで彼の誕生から十字架まで共に人生を歩んだのでしょう。クリスマスの背景にはこのイエス・キリストの命がけの祝福の物語があるのです。暗闇が深ければ深いほど、このクリスマスは意味があるのです。最初に礼拝として選ばれたのは羊飼いたちでした。彼らは、生まれた時から差別され、住民として人数にも数えられていない、最大の絶望の中にいた人たちです。そこから逃げ出すことはできません。「奴隷」です。奴隷を解放するためには彼らの一生分の賃金を払い、かつ釈放されなければ自由はないのです。聖書には「私の罪を背負って贖う」とありますが、贖うとは、「奴隷の解放」という意味です。では私たちは何の奴隷なのでしょう。それは「絶望」という奴隷です。私たちは自らをコントロールすることができません。愛したいのに愛せない、信じたいのに信じられない・・こんな汚い心が奴隷制度をつくりました。私たちの心の中にはこの自らの意図したところに進めないという深い「絶望」があるのです。「差別」とは何でしょう。ある人は「差別とは、同じ姿に生まれ、同じ肉体を持ち、健康であるにもかかわらず、その人が願っていることができないこと」だと言いました。私たちはわかっているようで、深いことはわかっていない、信じていますが本当なのかわかっていません。私たちには「わからない」という絶望があります。この「わからない」に解決を与えるためにイエス・キリストは来ました。なぜ、マリアはイエス・キリストを育てる時に苦しみと戦わなくてはいけなかったのでしょう。わかっているけどわからない現実があるからです。マリアは頭では、イエス様は「メシア」で救う人だとわかっていますが、３０歳までは息子として育ったのです。「 すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょう。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」」(ヨハネ２：４)
イエス様がこういった時から、「絶望」の始まりです。神に渡す時が来た、ここから何が起きたとしても自らの思うほうに導くことができない日がきたのです。ピエタ（嘆き）という像があります。マリアにとってはただただ絶望と傷みの日です。杭を打たれ、つばをかけられ、弟子たちも去っていく、裏切られる、マリアにとっては傷みと悲しみ以外にありません。親ならそんな彼らを憎しむでしょう。でもそれはしてはいけない、わかっているけど、何もできない‥そんな私たちの思いを贖うために十字架に架かったのです。私たちはしてもらったことに対して感謝ができないのに人には請求書を出そうとしてしまいます。「私がどれだけやっていると思っているの」という憎しみの値段が私たちを奴隷にし、被害者にし、自らの願うほうに動けなくしてしまっています。人を傷つけるのは当たり前、自分に敵対するものを裏切るのは当たり前になってしまったのです。本当はそんなことをしたい人なんていません。神様はこんな私たちに終わりを告げさせたかったのです。方法はほかにありませんでした。私たちの賃金を払いきるまで私たちが自由になれないことを知っていたのです。五木寛之という人の著書にこういう言葉があります。「どんな前向きに生きようとも誰でもふとした折に心が萎えることがある。だが、本来人間の人生とは苦しみと絶望の連続である。そう覚悟するところらからすべてが開かれる。」これは日本の現状をよく表しています。日本は、戦後、がんばって文明を作ってきました。「豊かな生活」こそ幸せだったのです。ところがそれが阪神や東北の大震災のときに崩れました。「物」への信頼が一気に失せたのです。だから今度は宗教でした。ところが宗教の行きつくところは、「争い」でした。そこからは「哲学」でした。「毎日ポジティブに考えれば変われる」ということでしたが、痛ましい事件がおこると、そんなことを前向きに処理することができません。今の日本人に必要な言葉は「がんばれ」「大丈夫」という慰めしかない・・・五木寛之はその著書でそう締めくくっています。でもこれでは本当の解決はありません。私たちに必要なのは、「真っ暗な心に光がともること」以外ないのです。「わからないことがわかる」こと以外なのです。見えない人生には解決はありません。だからイエス様は自らが見えない人生を歩んだのです。

イザヤ９：２～７

私たちがクリスチャンになっても見えないとすれば、そこにイエス様を入れていない証拠です。その部屋だけはあまりにも汚いので入ってほしくないのです。いろいろな理由をつけてそこを閉ざしてしまうのです。自分で「二度とこうしない」「私はこう生きる」と決めた部屋です。いまだにそこは「光」がともっていません。神様の声と信じて聞いていた言葉は別の言葉です。その心に傷みが来た時に聞いている言葉は本当の声ではありません。私たちを違う価値観に導き「戦争」に導くのです。「戦争」とは武器を持って争うことではありません。隣の人を排除することです。「この人さえいなければ」「あの人のせいでこんな目に」と思ってしまう部屋です。あなたは今何を見ていますか？闇ですか？それとも光ですか？「アドベント」とは「来たる」という意味です。人々は来るのを待っていました。だからイスラエルの人々はイエス・キリストが目の前に来たのに捜そうとしていなかったのでわかりませんでした。ずっと待っていたのです。だから家畜小屋で麻布を巻かれて生まれてきたようなイエス様を王とは認めませんでした。ダビデのように　戦い国々を治めてくれるような王を求めていたのです。聖書の中には探し求めた人と待っていた人の差が書かれています。あなたはどちらですか？マリアのように絶望にならないとわからないでしょうか。マリアは十字架に架かったイエス様の亡骸をおろしながら「これは何だったんだろう」と真剣に考えました。そして３日後にイエス様が復活したときに「このためだったんだ」とわかりました。「平安があるように」これが最初の言葉でした。神様と本当に出会うと心に平安があるのです。

子供たちのアニメの中にこんな言葉があります。

「人の人生の終わりとは死ではない。人から忘れ去られることである」真実ですが、怖い言葉です。「存在価値がない」という「死」です。ここには解決がないので、言葉だけが残ってしまうのです。

最後に

神様は私たちの心の中に潜む暗闇に光を灯されます。裏切られた絶望、過去の傷み、否定的な人々の声、目線・・そんな闇の中に光を放つために来たのです。2000 年前にイエス様は死ぬために生まれてきました。私たちが死ななければならなかった人生を贖い買い取るためにです。このクリスマスにこのことを「思い返せ」と言われています。ピエタとは「絶望」と同時に「慈愛」という意味です。マリアは絶望の中で愛することを学び、神を愛することを知りました。何か解決したわけではありませんが、心の解決があったのです。これが「神の愛」です。今、私たちは心を頑なにせず、神様に心を開き、この愛を受け取りましょう。そして闇に光を灯し、光の中を歩んでいきましょう。

（要約者：岩崎　祥誉）

（１２月２５日）